被災したまちを「つくりなおす」

――神戸市長田区・鷹取東第一地区、旭若松、野田北部の28年

後藤・安田記念東京都市研究所 研究室

後藤・安田記念東京都市研究所研究室では、2022年度において、「阪神・淡路大震災は「まち」をどう変えたか」というテーマを掲げて調査を実施してきた。具体的には、人口・住宅・土地利用などにかかるデータ分析を実施するとともに、神戸市において3度にわたる現地調査を実施し、現地踏査、地域住民他関係者へのヒアリング、区画整理事業が実施された地区における空地の発生状況に関する巡検などを行った。本稿はその調査の成果報告論文の第2回である（全3回で本誌に連載予定。それに加え、復興事業実施地区における空地に関する研究論文も現在準備中である）。

1 はじめに

震災によって大きな被害を受け、大規模な面的整備事業が実施された地域においては、街区の姿が大きく変わり、そこに建てられる住宅その他の建物もほぼ全面的に更新される。また、そこに暮らす住民の顔ぶれも、地震の前とは必ず変化する。まして、発災から28年という時が経過すればなおさらである。

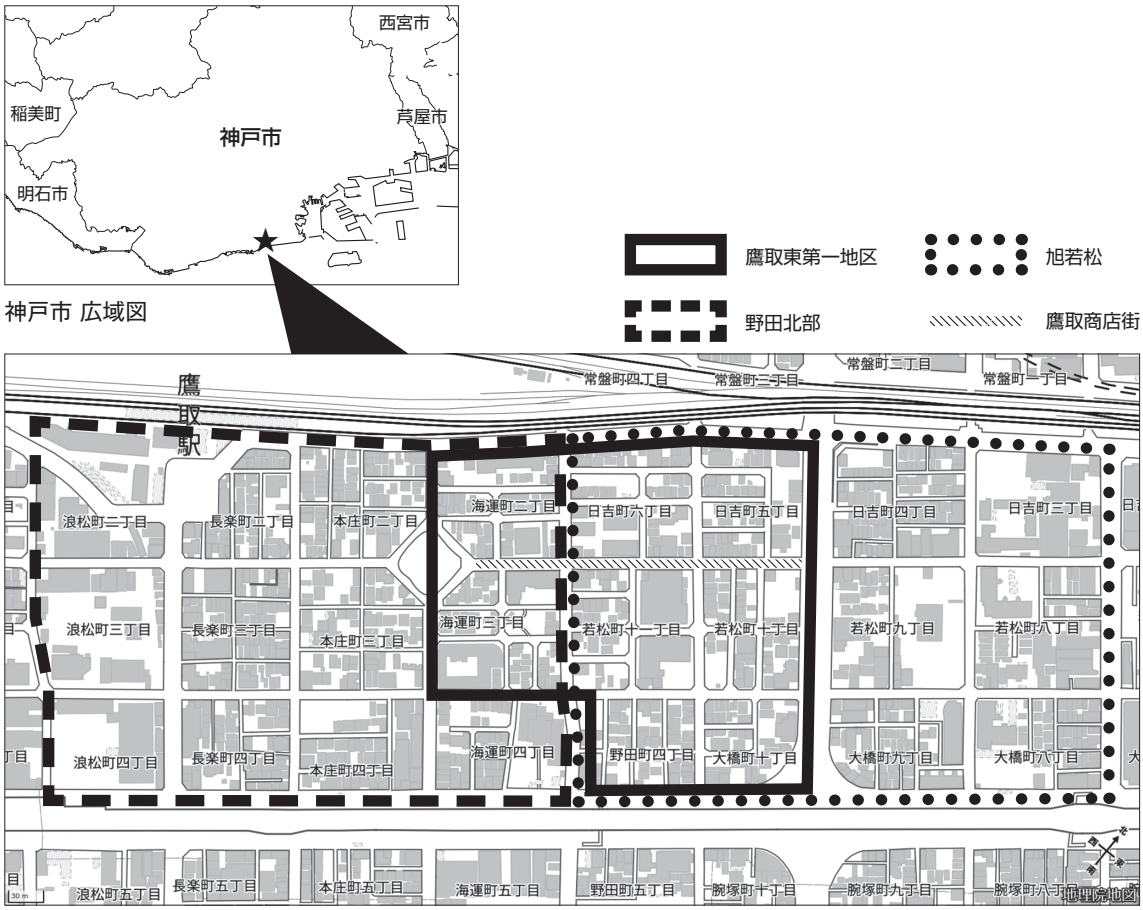
しかしそこには、まちを一から「つくりなおす」営みを続けてきた人々がいる。「まち」は《物理的空間》であるとともに、そこに生きる人々が織りなす《関係的空間》でもある。したがって、まちをつくる、つくりなおすとは、単にハード面の（再）構築にとどまらず、人と人の関係、「つながり」の（再）生成をも含むものになるのである。

本稿は、神戸市長田区の鷹取東第一地区、旭若松、野田北部（それぞれの地区の説明は後述）を取り上げ、その「まちのつくりなおし」の歩みを、主に「つながり」に焦点を置いて紹介し、若干の考察を加えるものである。

2 地域の概要

本稿で取り上げる「鷹取東第一地区」、「旭若松」、「野田北部」は、JR神戸線鷹取駅と新長田駅の間にあって、神戸線と西国街道（国道2号線）に挟まれた一帯である。「鷹取東第一地区」とは、震災復興土地区画整理事業の実施地区名であり、神戸市長田区の海運町2丁目・3丁目、日吉町5丁目・6丁目、若松町10丁目・11丁目、大橋町10丁目、野田町4丁目の8丁を包含する。このうち、海運町2丁目・3丁目は「野田北部」、残り6丁は「旭若松」に含まれる。両地区はいわゆる自治会連合会の区域である（ただし後述するように、野田北部には現在、地区全域を範囲とする単一の自治会が存在するのみである）。

野田北部には、海運町2丁目・3丁目の他に、海運町4丁目、本庄町2～4丁目、長楽町2～4丁目、浪松町2～4丁目の計12丁が含まれる。旭若松には、日吉町5丁目・6丁目、若松町10丁目・11丁目、大橋町10丁目、野田町4丁目の他に、日吉町3丁目・4丁目、若松町8丁目・9丁目、大橋町8丁目・9丁目の計12丁が含まれる（以下原則的に、



本稿で取り上げる「鷹取東第一地区」「旭若松」「野田北部」

（国土地理院の地図をもとに作成）

「丁目」は省略して表記する）。

整理すると、①区画整理事業が実施された鷹取東第一地区は旭若松と野田北部の両地区にまたがっており、また、②旭若松・野田北部の両地区を構成する丁のうち、鷹取東第一地区に含まれる丁は一部分（旭若松では全12丁のうち6丁、野田北部では全12丁のうち2丁）であった。なお、鷹取東第一地区の区域の中央を鷹取商店街が東西に横断しており、これは旭若松・野田北部の両地区にまたがっていた（旭若松では日吉町5・6、若松町10・11が、野田北部では海運町2・3が商店街に面する）。

鷹取東第一地区には、発災前、8.5 haに905世帯2051人が暮らし、建物棟数は550棟であった。うち全壊494棟、半壊40棟で、建物の被災率は97%に及んだ[1]。地区内では大規模な火災が発生し、野田町4を除いてほとんどの建物が焼失した。倒壊した家屋に生き埋めにされ、そこに火の手が回るという凄惨な事象が各所で発生し、多くの人命が失われた。野田北部においては41名が亡くなっており、そのうち16名は区画整理地区内の海運町2・3の住民であった[2]。

3 発災前の地域の動向

発災前のこの地域において、押さえておく必要のある重要な動きが大きく二つある。一つは、野田北部の自治会を中心としたまちづくり活動と鷹取商店街の活性化に向けた動きの合流、もう一つは、スペインの少年サーカス団との交流会の受入れにおけるカトリック鷹取教会と鷹取商店街、野田北部の自治

会の接触である。

まず第一の動きについて。1990年ごろから、野田北部の自治会（野田北部には町丁単位の自治会は存在せず、「野田北部自治連合会」という単一の自治会となっている）では、住民の高齢化、木造住宅の老朽化、細い路地、違法駐車・駐輪などの地域の課題を認識し、それらの解決を目指すまちづくり活動の機運が生じてきた[3]。一方同じころ鷹取商店街では、街灯のリニューアルを契機として商店街の活性化が課題にのぼる[4]。

だが当初、商店街と自治会は「あまり相容れなかった」[5]。野田北部の自治会関係者は、「商店街は商店街でやればいいんだけども、それ以外の自治会活動では、こちらに出席してほしいという思い」があったが、「わしらは商店街でやってるんやという感じが、当初あった」と振り返る[6]。

しかし、商店街の活性化の検討過程において、野田北部の自治会関係者がそれを積極的に応援・支援し、商店街の関係者も「地域」の重要性を再認識することで、商店街の一部が野田北部の自治会活動（自主防災・防犯など）に関わりを深めていくことになる[7]。

野田北部の自治会のまちづくりへの志向は、1993年1月の野田北部まちづくり協議会（まち協）の結成につながった。まち協には商店街から4氏が参加することとなる。まち協は地区にある大国公園と、公園から南北に延びるコミュニティ道路の整備に取り組み、商店街の4氏は周辺住民への「説得」に尽力した[8]。公園と道路の落成式は1994年12月に行われる（発災の1ヶ月前である）。かくして、野田北部の自治会と鷹取商店街（の野田北部地区）の人々のつながりが、発災前に生み出されていたのである（なお、4氏のうちH氏とY氏は発災後のまちづくり協議会の活動にも深く関わった。Y氏はその後地区外に転居したが、H氏はいまもなお野田北部で理髪店を営んでいる）。

第二の動きは、海運町3に所在するカトリック鷹取教会のK神父が、鷹取商店街のK会長（旭若松側で衣料品店を営んでいた）に相談して発起した、スペインのベンポスタ子どもサーカスとの交流会である。

交流会は1993年8月に大国公園において「長田千歳婦人会、旭若松連合会、野田北部自治連合会、旭若松連合会子ども育成部会、野田北部自治連合会子ども会、鷹取市場、鷹取商店街」の主催で開かれた[9]。すなわち、野田北部・旭若松の垣根を超え、自治会その他の住民組織と商店街が共催するという形になったのである。

このような形にできた下地には、上述の第一点、すなわち自治会のまちづくり活動と商店街活性化の取り組みの重なりにおける両地区・両者の「出合い」があったと言えるだろう。さらに加えると、K神父はこれまで地域との関係をほとんど持てておらず、この企画をきっかけとして、まち協のA会長やH氏、Y氏らと知己を得ることになった[10]。さらなる出合いの場を作ったものと考えられる。ただしこのイベントは一過性のものであり、K神父はそれ以後、地域との日常的なつながりを維持できなかったと感じていた[11]。

4 地域間に働いた引力と斥力

(1) 非常時の引力

1995年1月17日の発災後、旭若松と野田北部の間に、「非常時の引力」とでも呼ぶべき力が働き、両地区がともに活動する場面が見られた。

まず発災直後。まち協のA会長は「震災当日の9時半ごろには、もう……〔旭若松の〕F君〔原文実名〕とかが、皆……野田北部に入っていた」[12]、そして、発災後即座に立ち上げた「復興対策本部」の拠点を、JR鷹取駅前に鷹取商店街の青果店（若松町11）の店主が乗り入れてきた自家用ワゴン車の中に置いた[13]、と回想している。また、翌日18日の早朝には商店街のカメラ店店主で長田区消防団第7分団に属していたF氏（上述の「F君」と同一人物）と連れ立って長田消防署にレスキュー隊の派遣要請に行っている[14]。ちなみにF氏が属していた第7分団は野田北部の各町を管轄していない（管轄は第8分団）。

その夏（8月5日）、大国公園で「しぼりだせ！大国公園夏まつり」が開催された。発案したのはK神父で、「日ごろ一緒に活動することが少ない両地区の住民組織に、教会という第三者的な立場から呼びかけ、両地区共同のイベントをできないか」という思いがあった[15]。開催にあたっては準備委員会を置き、「集会を重ね、“屋台、だんじり、カラオ

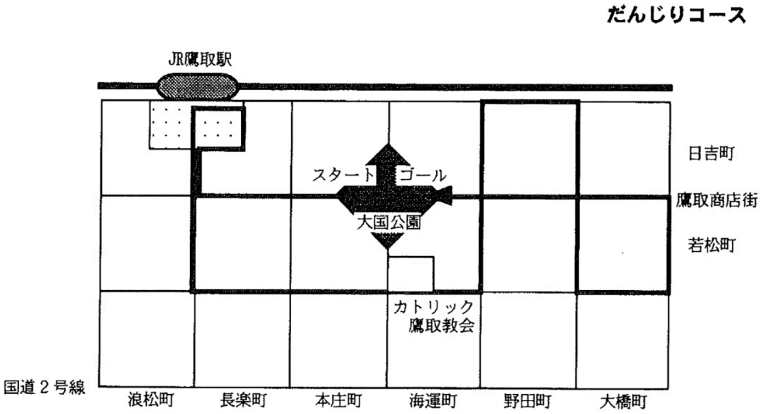


図　「大国公園夏まつり」におけるだんじりのコース

出典）『記憶』119 頁。

ケ、盆踊り”の四つの分野に分けて話し合」ったという[16]。この時だんじりが練り歩いたコースが図のとおりで、野田北部・旭若松の双方を通っていることが分かる。

また、鷹取教会のボランティアの拠点・鷹取救援基地でボランティアリーダー（画家）を中心に活動した「壁画隊」は、地区に残された、あるいは再建された建物の壁面に絵を描いた。きっかけは、鷹取商店街（旭若松側）の洋品店の店主がプレハブ店舗で営業を再開した際、リーダーに「焼け跡に真っ白の店は照れくさい。何か描いてくれませんか」と依頼したことだったという[17]。壁画隊はこれも商店街の旭若松側で被災を免れ、被災者やボランティアに風呂を開放していた銭湯・幸せ湯の壁面にも大きな絵を描いた。「「壁画隊」の作業中に地域の住民が飛び入りで参加することも少なくな」く、「つながり」づくりに寄与した[18]。

地区では「ガレキに花を咲かせましょう」という取り組みも行われた。都市計画プランナーのＡ氏・Ｋ氏の発案で、被災した空き地に花の種を播き、花を咲かせようというものであった。これは神戸市・芦屋市の複数の地区で行われたが、鷹取東第一地区においては海運町・日吉町・若松町で５月 28 日に種が播かれ、夏には開花した[19]。

年末には「ドリームページェント in たかとり」が開催される。野田北部で活動していた長野大学のボランティアグループを中心とした実行委員会が企画したもので、メイン・イベントは長野から贈られたクリスマスツリーに、夕方、長野の会場と同時に電飾を点灯しようというものであったが、その昼、野田北部と旭若松の住民が合同でもちつき大会を開いていた[20]。野田北部のボランティアたちが企画名を「たかとり」としたことにも、はっきりと意図が感じられる。

同様に「鷹取」を冠したイベントは、翌年の晩秋にも行われた。1996 年 11 月の「世界鷹取祭」である。これは「建築祭」「まちなみ祭」「文化祭」「コミュニティ祭」という４つのサブカテゴリの下に多くの企画が行われた。「野田北部と旭若松地区住民が総力を挙げて取り組んだ」[21] 大イベントであった。大国公園の他にあった三つの会場のうち一つが日吉町６丁目であり、神輿は旭若松・野田北部双方の住民が担いだ[22]。大国公園ではベンポスタのサーカスが演じられた。ベンポスタを呼びたいと熱望したのは鷹取商店街のＫ会長だったという[23]。これはほかならぬ、1993 年夏の再来であった。

(2) 区画整理事業の斥力

一方で、地区で施行されることになった区画整理事業は、地域間に斥力を生じさせた。

既述のとおり、野田北部にはすでにまちづくり協議会が自発的に結成されており、早くも２月５日の役員会では、Ａ会長が「公園や道路を広くとり、次の世代に渡せる街にしたい」と決意を述べる[24] など、地区一帯での面的整備事業による「復興」の方向性が打ち出されていた。

旭若松でも、3月に日吉町5・6、若松町10・11の4丁で「復興委員会」が結成された[25]が、この4丁では各丁単位でも勉強会が開かれていた[26]。旭若松全域を単位としたまちづくり協議会結成の動きもあり、「区画整理事業計画を〔1995年〕2月に知った後、まちづくりの話し合いを関係12ヵ町でし、「まちづくり協議会」を結成しようと千歳小で合同会議をも」ったが、「コンサルタントが行ったアンケートで……結成への過半数の賛成が得られず」[27]、実現しなかった。

4月〜5月にかけて、「コンサルタントM氏の仲介による旭若松各町と野田北部地区との合流」[28]により、「復興まちづくり協議会」の結成に向けた動きが起こる。しかし住民の中には「復興の加速化が安易な意志決定につながるのではないかという危惧や反発を示す人もみられ、各町の会合の重視……が協議会の理念として確認された」[29]。

そんな5月下旬、「海運町二・三丁目の道路・公園図案（コンサルタント案）」が新聞に発表された[30]。この公表に旭若松各丁の住民が反発し、「公表内容がそのまま各町に及ぼされては困る」という危惧から各丁で道路・公園等に関する独自案の討議が進むことになった[31]。もともと旭若松では「各町の会合の重視」の雰囲気が強かったところ、「これ以降事業案や重要な議題について各町の会合で徹底的に議論する機運が高まった」[32]のである。

7月2日、鷹取東復興まちづくり協議会（以下、復興まち協）が設立された。会長は若松町11（商店街のK会長）、3人の副会長は日吉町5、6、若松町11（F氏）から出され、事務局長と事務副局長は海運町2、3（Y氏とH氏）、会計は若松町10、監査は海運町2と若松町11から出ている[33]。会長・副会長は全員が旭若松住民であり、9人の役員中、野田北部は3人であった。なお、旭若松の野田町4と大橋町10からは一人も役員が出ていない。「2町（大橋町10丁目・野田町4丁目）は、戦災復興土地区画整理事業につづいての2度目の土地区画整理事業となるため、特に野田町4丁目は火災を受けておらず……事業の導入そのものに対して拒否反応が強かった」[34]ことと関係していたかもしれない。

ともあれこうして区画整理事業についての意見集約を行う復興まち協が作られたわけだが、旭若松の6丁については各丁単位の議論が重視されるという雰囲気は変わらなかった。事業に携わった神戸市の担当者は後日、「当地区は町毎に住民の独自性が非常に強く、特に町内に新設される区画道路に対する町毎の住民の考え方が全く異なっていたため、道路の規格の統一が出来なかった」[35]、「幅員だけあげても、町内の道路がすべて標準の6m道路で統一されている町、4.5mと6m道路が混在している町、さらには6m未満の道路しかない町と様々である」[36]と述懐している。

同じ担当者は「協議会内部に住民間の様々な意見の対立があった」[37]とも振り返る。大まかに言えば、野田北部の丁と旭若松の一部の丁は区画整理事業の早期着手を志向し、他の丁は行政を相手に「条件闘争」[38]を試みる傾向にあった。こうした復興まち協内部における分裂が極まり、一時は事業計画の検討が「凍結」されるまでに至る。「凍結」はおよそ3ヶ月（96年1月末〜4月中旬）で「解除」され、8丁での事業に復帰したが、意見の相違・対立は、「各町の独立性」を強める方向に働き続けた[39]。

さらに、区画整理事業が行われた後、先に見た通り、野田北部と旭若松の間に架かっていた小さな橋とも言えた鷹取商店街は、かつての姿を失ってしまった。現在、商店街組合に加入するのは21の店舗・事業所（うち野田北部に立地するのは4店舗）で、そのうち「目抜き通り」沿いに構えているのは16店舗である。300m弱のこの道沿いに16店では、「線でつながっている」という感覚は持ちづらい。

こうして、基本的に地域社会のつながりの単位は発災以前のもの（野田北部では自治連合会、旭若松では単位自治会や連合会）に復した。たとえば世界鷹取祭の1ヶ月後、96年12月の大国公園でのもちつきは、すでに野田北部単独で行われていた[40]。

鷹取東第一地区（の旭若松側）に関わりをもった研究者は、1998年秋に「現在まちづくり協議会と再建が進む各町の自治会との合議と連携が図られようとしている。日常生活におけるまちのソフトウェアを中心的に扱う自治会と、緊急事態にハードウェアの復興事業を推進してきたまちづくり協議会の合同が成功裏に進むならば、まちに新たな発展段階がもたらされることになるであろう」[41]と見ていたが、これも成らなかった。復興まち協は解散し、「鷹取東第一地区」といういわば「官製」の地区区分は、基本的に消滅したのであった。

5 まちを、つながりを「つくりなおす」

こうして、「地域」のつながりの単位は旧に復した。しかし、そのそれぞれの「単位」の中では、震災が人と人のつながり、地域のつながりを生み出すきっかけともなっていた。本節ではそのことについて、旭若松、日吉町5丁目（旭若松地区の単位自治会）、野田北部の動向を具体的に見ることで論じたい。

(1) 旭若松

1995年2月5日、旭若松地区の合同葬儀が、若松ふれあいのまちづくり協議会の主催で行われた[42]。葬儀委員長を務めた当時の旭若松連合会長は「あの合同葬儀が住民がまとまるきっかけだった」[43]と振り返っている（ただ、この「まとまり」が区画整理事業の展開過程において斥力に晒されたことは前節で見た）。

主催となった「ふれあいのまちづくり協議会」とは、1990年3月に制定された「神戸市ふれあいのまちづくり条例」に基き、「地域福祉の向上を図るため、地域の福祉関係団体及び公共的団体の代表者並びに地域の住民により自主的に組織する」（第3条）団体である。おおむね小学校区を単位として置かれ、地域福祉センターを主な拠点にふれあいサロン（喫茶）、ふれあい給食、料理教室、子育てサークルなどの事業を担っている[44]。旭若松においてふれまち協が主催し、現在でも続いている行事としては、1月17日の慰霊式（後述）と、12月のもちつき大会がある。

ふれまち協と同様に、この地区に存在する組織に「防災福祉コミュニティ」（防コミ、または防福）がある。これは、阪神・淡路大震災の発災を契機として神戸市が「市民の防災意識の向上と組織的な災害対応力の強化を目的」に始めた「防災福祉コミュニティ事業」により、各地区で結成されたものである[45]。市は「「ふれまち協」の活動と連携・融合した活動ができるよう」、防コミの結成単位もおおむね小学校区単位とし、「地域特性に配慮し、一律に新たな組織を立ち上げるのではなく、「ふれまち協」の一部会（防災部会）として防災活動に取り組む」という形態も許容して、結成を促進した[46]。

若松地区防災福祉コミュニティは1998年4月に結成された[47]。その先進的な取り組みとしては、「昼間の災害発生には女性の存在が欠かせないとして、女性住民に協力を呼び掛け」て1999年5月に発足した「若松ふれまち女性防災員」がある[48]。「この地域には、もともと地域の担い手の高齢化が進み、若手男性の参加が得られにくいという事情があり、それが家庭だけでなく地域も私たちの手でという、女性防災員の結成につながったという。近隣が協力して家庭防火に貢献するため、「火災予防など、防災思想の普及に関すること」「火災など災害防止のための広報に関すること」「家庭内における防災技術の研究に関すること」などの事業を進めている」[49]。名称から、ふれまち協との連動関係がうかがえる。実際、発足式であいさつしたのも、ふれまち協の委員長（と地元消防署の署長）であった。ただし現在、この「女性防災員」が活動している様子はうかがえない。

1998年9月には、鷹取東復興まちづくり協議会の第4回総会に合わせ、地元の小・中学校のボランティアの協力で「みんなの復興フェスティバル」が開催され、約450人の住民が参加したという[50]。野田北部側の記録などにこのイベントの記載が見られないことから、旭若松の住民が中心となって実施したものと推測される。

2001年2月、区画整理事業により、若松町10・11にまたがる面積1000 m^2 の若松鷹取公園が完成した。この公園は、（区画整理事業地外も含め）旭若松地区内で最も広い公園として地区の住民の行事・イベントの会場として使われるようになる。区画整理事業の完成式も、2001年7月、この公園で実施された[51]。

その年[52]、公園に埋設されている100tの耐震性貯水槽を使用した消火訓練が開始される。ホースの延長・巻き取り、筒先（放水口）との連結から、エンジンで動く可搬消防ポンプを持ち出しての放水までを実施する、本格的な訓練である。主導したのは、3節でも名前の出てきた、元カメラ店主のF氏（元若松町11丁目自治会長）である。これは現在に至るまで継続的にほぼ毎月実施されており、（筆者が参加させてもらった）2023年2月の訓練は「第196回」であった。

F氏は他にも「防災には地域のコミュニティー作りが大切」と、「盆踊りにもちつき、ふれあい喫茶、

絵手紙教室」などイベントを次々と企画してきた[53]。これらはおそらく、連合会、あるいはふれまち協の事業として実施されたものと思われる。このうち「もちつき」は（先ほども述べたとおり）現在でも続いており、直近では2022年12月に（ウイルス禍のため3年ぶりに）若松鷹取公園で開催された[54]。

また、若松鷹取公園では2002年1月から、三宮の東遊園地に置かれている「希望の灯り」から採火し、数多くのろうそくに灯して並べて文字を描くという形式の追悼式が、旭若松連合会の主催によって執り行われるようになる[55]。発災から20年の節目を過ぎたところで、「もう止めるべきだ」という意見もあって規模は大きく縮小したという[56]が、現在も引き続き行われている。

(2) 日吉町５丁目

日吉町５丁目は、鷹取東第一地区の中では北東端に位置する丁である。先述の通り、一地区一自治会となっている野田北部に対し、旭若松には各丁単位の自治会とその連合会があり、当丁にも「日吉町５丁目自治会」が存在し、次に述べる地域活動の多くを担っている（「あわせの地蔵」に関わる行事については、別会計の「あわせの会」で実施しているという）。

現自治会長のＳ氏の話によれば、日吉町５丁目は地震の前、とりたてて住民間のつながりが強い町ではなかったという。しかし、区画整理事業の検討過程においては「意見のはっきりした人（特に慎重派、行政不信派）が多く、マンション住民や借家住民も参加して……さまざまな意見・論点が交わされる中……時間をかけて徹底的な討論が行われてきた」[57]。意見のぶつかり合い、葛藤もありながら、その濃密なやりとりを通じて、住民は互いのつながりを築き上げていった。

1995年の７月下旬、当時の自治会長が心不全で急逝する。住民たちは、会長としての心労がたたってのことだったと考え、震災死の認定申請にあたって「申添書」（手続き的には必要な書類ではなかった）をしたためたという[58]。９月末、自治会長の死は震災死と認定された[59]。

同じ95年の８月の地蔵盆の日、住民たちは、地区の瓦礫の中から掘り出して補修した地蔵２体を囲み、集った。更地に車のヘッドライトを照明として夜通し開かれたこの集まりには、約100人が集まった[60]。住民はその時のことを「何もなかったこの町で、夜通し開いた地蔵盆を忘れることはできない」と振り返る[61]。この「地震後初の地蔵盆」は、地域の人々の心に刻まれ、この丁の原点になったものと思われる。地蔵盆は（多い年には1000食にもなったというカレーライスの「振る舞い」をやっていた時期もありながら）現在でも続けられている。また、2002年からの一時期には盆踊りも開かれており、音頭や振付も「手づくり」したという[62]。筆者は今年の地蔵盆に足を運んだ。地区内の会場（後述のポケットパーク）付近の街路上空にたくさんの赤い提灯が吊られ、地蔵の周りのテントには地区の子どもたちの名や「地蔵尊」の文字が記された白や桃色の提灯が掲げられていた。夕方、折り悪く激しい雷雨に見舞われたが、地区の人々（手伝いに若い住民が参加していたのが印象的であった）と、地蔵をお参りしてお菓子をもらう地域の（丁内・外を問わない）子どもたちが会場を埋め尽くし、とても賑やかな光景であった。

その後、この２体の地蔵に、大阪の住職らから贈られた檜彫りの地蔵（「あわせの地蔵」と名付けられた）を合わせた３体を安置する地蔵堂が住民らのカンパによって作られた。その場所は、区画整理事業によって丁内に新しく整備されたポケットパークの一角であった。以後、このポケットパークは（旭若松にとっての若松鷹取公園のように）丁内の人々の行事の場として使われるようになる。

1999年１月、完成直後のポケットパークでは、丁の慰霊祭が開かれ、避難所で使われていた大鍋で作られた豚汁が振る舞われた[63]。以後、慰霊祭は毎年実施されるようになり、（ウイルス禍においても中止することなく）現在に至っている。今年の慰霊祭は2023年１月17日に開かれ、午前５時46分の黙祷の後、人々は振る舞われる豚汁とぜんざいを囲んだ（食べ物の提供は、ウイルス禍の影響により３年ぶりであった）。寒中、夜明けまで灯りは消えず、人々が残り、語らっていたのが印象深かった。

同じ99年の２月には、丁内に前年末に竣工した集合住宅に引っ越してきた別地区からの住民との親睦を深めようと、自宅を再建した「旧住民」が交流会を開いている[64]。旭若松公会堂に約55人が集まり、食事をしながら交流を図った。当時の自治会長

は取材に「高齢者が多い街なので互いに助け合い、だれ一人孤独な思いをしない関係を築きたい」と語っている。

丁では慰霊祭の他、被災の年からもちつきも行われてきた[65]。2004年には、その年の10月に発生した中越地震で被災し、町の有志がボランティアに出向いた山古志村（現長岡市）に、ついたもちを送っている。その縁から、翌05年1月の慰霊祭には村長の長島忠美が参加[66]、その年の春には山古志村の倒木から制作された童地蔵が地蔵堂に新たに安置され、4月の自治会総会を兼ねた「花見」でお披露目された[67]。被災地にもちを送る活動はその後も続き、たとえば2016年には熊本地震で被災した南阿蘇村に鏡餅を送っている[68]。

(3) 野田北部[69]

野田北部に特徴的なのは、区画整理事業が施行されなかった町（の一部）において、街並み誘導型地区計画が導入され、加えて街なみ環境整備事業（街環）による細街路（路地）の美装化が実施されたことである。この事業は野田北部まちづくり協議会（まち協）が主導した。

街環は1997年7月に着手され、98年4月、長楽町3の2本の細街路の美装化工事が完了する。この年の11月には、まち協の主催で「いきいき路地フェスタ」と称するイベントも行われた。美装化が完成した路地で、七輪でサンマや焼き鳥が焼かれ、小学生がクレヨンで路地に絵を描く「路地絵コンテスト」などが行われた[70]。2002年4月にも、整備路線の長さが細街路全体の50%を超えたことを記念して、同種の企画「路地で遊びましょう！」が開催されている[71]。

細街路整備はその後も継続され、2006年度まで続けられた（28本の路地が美装化された）。工事が完了するたびに、その路地でもちつきを中心にした完成式が行われた[72]。なにより、工事には当該細街路の沿線住民すべての合意が必要であり、その形成過程が住民間の付き合いを生み出してきた。主導した住民（K氏）は「本来ハード事業と思われる細街路整備は副産物として、度重なる説明会等を通じ「近隣同士・まち協・行政」の三位一体というコミュニティを生んだ」[73]と振り返る。

1999年3月、海運町2丁目に6階建ての受皿住宅（発災前に賃貸住宅に居住していた住民が引き続き地区内に住み留まるために用意された住宅）が完成したことを祝し、「野田北部コミュニティ祭」が開かれる。街の中を歩き回るクイズラリー、公園ワークショップ、震災直後から応援してくれたボランティアのリサイタルなど様々な催しが行われ、最後に「野田北部コミュニティ宣言」が読み上げられた[74]。それは、「復興」の局面を終了させ、「日常」のまちづくりの段階に足を踏み入れるという宣言であった。

その年の9月、野田北部は神戸市の「コンパクトタウン検討モデル地区」となる[75]。野田北部の住民と神戸市役所の職員が「一緒に勉強」するうち、「コンパクトタウン検討会」はやがて「ふるさとづくり検討会」と名称を変える。2001年10月に鷹取駅舎・自由通路デザインワークショップを開きJRと神戸市に要望書を提出するなどの活動を経て、2002年1月の「野田北ふるさとネット」（本部長：H氏）の発足につながった[76]。これは、堅い実体を持った組織というよりは、地区内の各種組織・団体（自治連、まち協、ふれまち協、防コミ、婦人会、長寿会、民生委員・児童委員など）の連携の場、ネットワークとされている[77]。

ふるさとネットが住民に身近な問題として主に取り組んだのは、まちの美化対策（ごみ・吸い殻のポイ捨て、迷惑駐輪、犬や猫の糞害など）であった。2003年9月から04年4月まで、全7回の「野田北部『美しいまち』への取り組みを考えるワークショップ」を開催するとともに、地区全戸を対象とした「美しいまちアンケート」を実施したり、現地の実態調査、パトロールなどを行った。活動の成果として2004年6月に発表されたのが「野田北部美しいまち宣言」である[78]。

この宣言を出した次の月から、「美化・環境・防犯」のために地区内を巡回して、ゴミや犬のふん拾い、違法駐輪・駐車のチェックを行う「クリーンパトロール」が定期的に始められた。開始当初は月3回、1回目は午前、2回目は午後、3回目は夜に実施されていた。やがて参加者数が減少したためか[79]、2013年4月の1回目を最後に中断されたが、翌14年の7月、「公園などにおけるいたずらなどが目に付いてき」たため、月1回、夜間の防犯・クリーンパトロールが復活する[80]。その後、2016年10月末

に大国公園で「少年達が雑誌を持ち込み放火」し「消防車5台、パトカー2台」が出動するという事件が発生したことをきっかけとして「防犯防災パトロール」が重点的に実施される時期もありながら、2017年11月以降、「防犯クリーンパトロール」として、月1回実施されている。

ふるさとネットの活動の大きな展開に、鷹取駅前駐輪場の指定管理者となったことが挙げられる。鷹取駅周辺の「迷惑駐輪」を地域課題ととらえていたK氏が、地域で駐輪指導を行えないかと神戸市（西部建設事務所）の担当者に繰り返し持ち掛けていたところ、「指定管理者制度を利用して地域で駐輪場管理やったら、駐輪指導も委託できるかも？」と言われたのがきっかけであった[81]。地域内での議論の末、申請することとなったが、指定を受けるには法人格が必要であったため、K神父が代表を務め、自治会関係者も理事を務めるNPOたかとりコミュニティセンター（TCC）が名目上の申請者となった。指定管理は2005年8月に始まり、翌年9月からは駅北側の駐輪場も合わせて管理を引き受けることとなった（当初の指定期間は2009年3月末まで）。

管理スタッフは地域住民と地域外住民の混成となっており、現在でも野田北部住民とそれ以外は半々くらいだという。「有償ボランティア」という位置づけのため、報酬額は高くない（2006年5月時点では600円／1時間[82]、現在は750円）。よって、おのずとスタッフはパート・アルバイトという枠組みで働こうとするのではない高齢者が中心となる。2008年末の時点ですでに、「スタッフの平均年齢は70歳を越えるところまで来てい」[83]た。「かわらばん」には定期的に求人広告が掲載されており、以前は「70歳くらいまで」と年齢制限が設けられていたが[84]、直近の募集では「年齢不問」となっている[85]。そもそもは迷惑駐輪対策として始められた取り組みであったが（そして、いざ管理を始めてみれば、駐輪場外の駐輪への指導の他、無賃駐輪などの不正にも対処しなければならないなど困難は多かったものの）、関係者自身が「本当の喜びは「おはようございます！」「行ってらっしゃい！」「こんばんは！」「お帰り・お疲れさま！」〔という〕何気ない利用者のみなさんとの会話なのかも知れません」[86]と書くように、ライトなつながりを生み出す機会になっている。また、筆者が話をうかがった女性スタッフ（旭若松在住）は、家に一人で居るのではなく、ここに出てきて働くことが生きがいになっている、と語った。このような意識で働いている人は少なくないという。

開始から2年半ほどした2008年3月に須磨海浜公園駅が開業し、鷹取駅の利用客が減少したため、「目を見張るほど利用者が減少してしまい、それによってスタッフのモチベーションまでもが、低下するという非常にありがたくない展開」[87]もあったが、指定管理は2009年、2013年、2017年、2021年と更新を重ねた（2017年からは、後述のように野田北部自治連合会が法人化したため、TCCに代わって指定管理者となった）。現在は、キャッシュレス化、定期券購入のウェブシステム化など、市から出される新しい要求に対応しながら、2026年3月までの期限で管理を続けている。

また、ふるさとネットは2009年1月、阪神・淡路大震災復興基金を原資とした「まちのにぎわいづくり一括助成事業」の補助金を受けて、たかとり教会に震災資料室を開設した。この補助金では他にも、「パソコン・プリンタ等の整備や鷹取の商店マップを作ったり、毎月美装化された細街路（路地）のまる洗いを行い、AED（体外式自動除細動装置）を地域に設置し、その使用のため市民救命士講習を開催」、「青池憲司監督に制作委託した「震災復興のあゆみ～あの時と今～」のDVD化」などが行われた[88]。

続いて、各種の行事・イベントについて見ていく。初めに慰霊に関する行事である。最初の合同慰霊祭は1995年4月23日に開催された[89]。その後、慰霊祭（1・17メモリアルデー）が1996年の1月から、自治会の主催により大国公園で毎年開かれるようになる。2006年には「自治会としての開催は十年を一応の区切りとして、今年からはございませんが、線香立ては用意しておきますので、皆様各自のご意思でお願いしたい」[90]という形式になったが、翌07年に再開。ふたたび2018年、「高齢化が進み、お参りされる方々が年々減少の傾向に有り……この様な現状の中で慰霊祭を継続していくことには自治会役員会でも賛否両論で止む無く継続は困難と判断しました」[91]として、この年を最後にすることとなった。しかし翌年から、K氏を委員長とする有志

により「のだきた1.17実行委員会」が立ち上げられ、追悼式は続けられることになった[92]。「実行委員会」は2019年から大国公園で地蔵盆も始め、これは「コロナ禍中」にも絶えることはなく、本年も開催された。

その他、自治会によるイベントとしては、まず、住民自身が「年間の最大イベント」[93]と位置付ける夏祭りがある。これは発災の年以降ほぼ毎年、8月の2日間に開かれてきた（雨のため、2009年は1日のみ、2014年は中止）。大国公園に食品の屋台や各種アトラクションが並び、夜には盆踊りが行われる。コロナ禍中で2020年、21年には中止となったが、22年は後述の防災訓練と合わせて「秋祭り」として10月に開催された。

同じく、発災後から続けられてきたイベントに大国公園でのもちつきがある（管見の限り、1999年については開催が確認できず、また2013年は後述の新集会所建設にともなって、翌14年の5月に延期）。毎年12月に開催され、地域住民の他、発災10年くらいまではボランティアが、その後は地域の高校・中学校の生徒が参加・協力している。

同じ12月の恒例行事としては、26日から30日までの5日間にわたる「年末特別警戒」、夜回りがあり、これは現在まで絶やすことなく実施されている。もともと夜回りは、95年の発災直後に地域の治安が悪化した際に、地域の人たちが自然に始めたもので、地域の結束の一つの象徴であった。これが絶やさず続けられていることには、その「原点」を受け継いでいこうという思いが感じられる。

同じように、被災した地域の「原点」に触れる活動として、大国公園で防災訓練が定期的に行われてきた。管見の限り最初の例は2003年9月の消火器による消火訓練である[94]。翌04年9月からは、防災訓練を実施した後にグランドゴルフ大会を開催するという形式で行われるようになっていく。さらに2006年3月には「野田北部防災福祉コミュニティ」が結成され[95]、それをきっかけとして4月にエンジンポンプを使用した放水訓練が初めて実施された。以後、秋の防災訓練はほぼ毎年定期的に、春の訓練は不定期で実施されている。その後の展開として、消火器訓練・放水訓練、起震車体験などに加え、民生委員と連携した「要援護者災害救援訓練」が実施されている[96]。

もっとも息長く続いているのは、「ふれあい喫茶」である。高齢者を対象に、コーヒーとモーニングセット（トースト、ゆで卵など）をワンコイン（100円）で提供し、集い・語らいの場を提供するもので、神戸市内の多くのふれあいのまちづくり協議会が実施している。野田北部では99年8月から、受皿住宅として整備されたエヴァタウン海運の集会所で、おおむね月2回開かれるようになり[97]、2014年の新集会所完成（後述）の後はそちらに会場を移した。また、新集会所の完成に合わせ、水彩塗り絵を行う「ふれあいサロン」も始まった（こちらはおおむね月1回。また、年1回、11月には手芸で干支の飾りつけを作る）。

2001年6月に子ども会が発足した[98]が、その後、目立った活動の展開は見受けられず、現在は消滅しているようである。しかし、子どもを対象にしたイベントとしては、2014年12月に「キッズクリスマス会」が始まり[99]、これは以後恒例行事となった。これは月1回の「キッズクラブ」に発展する。また、上述のふれあい喫茶の開催時に合わせて、集会所の2階を開放して子どもを呼ぶことで、世代間交流も図られている。

他に行われたイベントとしては、海運双子池公園で開かれていた野点の会（TCCの構成団体であり高齢者・障害者介護などを行うNPO・リーフグリーンとの共催）[100]、近郊へのハイキング、パターゴルフ大会などがある。

上述のような定期的な活動以外の大きな出来事として、2014年の「野田北ふれあいセンター」の落成がある（この施設を所有するため、この時あわせて自治会が法人化された）。2013年3月にそれまで使用していた集会所[101]の土地（市有地）の借受期限が到来し、加えて、鷹取駅前にあって長寿会（老人会）が集いの場として使ってきた「浪松老人いこいの家」も2014年3月に廃止されることになったため、それらに代わる新しい活動拠点が必要とされた。自治会関係者は市長に面談するなど積極的に働きかけ、集会所に市の地域福祉センターの機能も併設する施設として、2014年3月に竣工した。総工費4500万円のうち2500万円は住民などからの寄付で、残り2000万円は神戸市からの補助金が充てられた[102]。「野田北ふれあいセンター」は愛称である。

センターは2階建てで、1階部分にふるさとネッ

トの事務室と集会室が、2階部分にも集会室があり、集会室は住民が自由に利用することができる（有料）。たとえば2015年5月には、「食事会（長寿会）、ふれあい喫茶、ふれあいサロン、自治会総会、民生委員定例会、ふるさとネット定例会、着付け教室、英会話教室、フォークダンス、茶話会」に利用された[103]。

最後に、近年の地域の状況をまとめておく。現在ほぼ毎月定例で行われているのは、ふるさとネットの定例会、ふれあい喫茶（料金は150円に値上げされた）、ふれあいサロン、クリーンパトロール、健康体操である。また、夏祭り・もちつきはコロナ禍中で中止を余儀なくされていたが、2022年に再開。夏祭りも2022年は秋祭りとして再開（防災訓練と同時開催）、2023年は8月に開催された。K神父による毎回恒例の「駄菓子屋」や、ウクライナ名物を提供する屋台などが出店し、大盛況だったという[104]。コロナ禍中でも変わらず実施され続けた行事は、年末警戒と追悼式、キッズクリスマス会、地蔵盆であった。まちの「原点」に関わるものと、子どもに関わるものを止めなかったのである。その他不定期で天体観測会、グランドゴルフ、スマホ教室などが実施されている。

なお、まち協会長として地域を牽引したA氏、ふるさとネットの事務局長として奔走したK氏は、2021年4月に相次いで逝去した。2022年12月、東遊園地にある、震災の犠牲者や復興に貢献した人たちの名前を刻む「慰霊と復興のモニュメント」に両名の銘板が設置された[105]。

6 出合い、つなぐこと ――かけがえのない私と地域のために

こうして、旭若松、日吉町5丁目、野田北部の人たちは、地域活動を地道に積み重ねながら、被災したまちを「つくりなおし」てきた。

紹介されたような「些細な」地域活動にいったいどのような意味があるのか、と問う向きがあるかもしれない。それにはこう答えよう。その意味とは、「出合う」場を作り続けることにあるのだ、と。《関係的空間》としてのまちをつくるとは、出合い、出合い直し、出合い続けることである（ここで、「出合い」は新しい人と会うことだけを意味しない。旧知の人にも、付き合いの中で新しい一面を見つけることはあるだろう。それもまた出合いである）。本稿は、外部からとらえやすい出合いの場（を築く取り組み）を記し残した。

しかしここには次のような反応が予想される。なぜ地域活動などしなければならないのか。「出合い」を通した「つながり」などなくても自分は生きていける、むしろ、そういうものが面倒だからこそ、人は都市に暮らすのではないのか、と。

そのような疑問はある意味で自然なものでもある。現代社会において、人間の生存の大部分は貨幣経済の論理によって駆動する市場システムによって支えられている。そして都市とは、この市場システムが高度に集積した空間である。システムから受益できるがゆえに、生存のために「共同」・「協働」する必要がない（そして基本的にそのような生き方を志向・嗜好する）のが都市住民というものだろう。

しかしそれは、システムが盤石であり、個々人が貨幣によってそのシステムからサービスを得られる限りにおいて、である。言うまでもなく災害は、市場システムや個々人の経済的基盤の安定を（一時的にであれ）大きく毀損する。ゆえに、被災を経験した人々は、そこに立ち上がった「出合い」、「つながり」の意味や価値を生々しく実感している。

様々なものを失って不安ばかりの日々に、隣人たちと集い、とりとめもなく話した。それによって「心のふたが開いた」。ある旭若松住民がそう表現するのを聞いた。ゆえに、その住民の結論はこうである。「人間は自然には勝てん。だから一人ではあかん。手を取り合わんと」。また、ある野田北部住民はこう綴っている。「震災によって失ったものは多いが得たものもある。私の場合、それは“仲間（とも）”であった。……この仲間を前にして後悔することが一つある。なぜ震災前につき合いがなかったのか、なぜもっと早くに知り合えていなかったのか？」[106]。

被災の経験が苛烈であったからこそ、人々は「出合い」を通して「つながり」を生み続けることが、「次」にも必ず生きるであろうと確信する（これを有り体な言葉で言えば、「災害時におけるコミュニティの大切さ」となるのだろう）。だからこそ、被災を経験した人々は、地域に「出合い」の場を作り、残すべく奔走しているのである。2023年1月17

日早朝、三宮の東遊園地で行われた「阪神・淡路大震災 1.17 のつどい」（実施主体は市民による「実行委員会」だが、神戸市の公式の「追悼行事」も同時に開催される、大規模な行事である）では、ろうそくで「むすぶ」の文字が灯された[107]。しかし同じ時間、旭若松の人たちは、その同じ火種を取り、若松鷹取公園で「つなぐ」という文字を灯した。この「つなぐ」という言葉に、筆者は地域の人たちの思い、意志を感じる[108]。

さらに言えば、「出合い」や「つながり」の意味は「非常時」のみにあるのではない。（都市の）人々の生存を支える当の市場システム（の基盤である貨幣経済や資本主義）は、人間をシステムの「（使い捨てできる）部品」として、交換可能なものにおとしいれてきた。自分以外の誰かがそれをできる。自分がいなくても組織は、社会は、世界は回る。このような状況に置かれた人々は、「生の実感」を失い、幸福感を奪われているのではないか。今こそ求められているのは交換不可能性、「かけがえのなさ」なのではないか。

「出合い」や「つながり」は、「かけがえのなさ」の源泉である。互いに顔が見え、認め合える関係の中で、他者のために何かを為すことで、人は自らが社会の「部品」などではなく、ほかならぬ一個唯一の「私」（であり「あなた」）であるという実感を得ることができるだろう。

地域の「かけがえのなさ」もまた見直されるべきである。人や「人と人のつながり」は、その場所に決定的に固有であるという意味で、地域の「かけがえのなさ」の源泉となる。かけがえのない地域は、その地域のため、地域に生きる人のために何かをなそうという人を引き寄せ、そのような人がいることがまたその地域のかけがえのなさをつくる。こうやって、かけがえのない小さな社会において、人々が互いのかけがえのなさを承認し、出合い、つながりを築きながら幸福に生きていく循環が生まれるのではないだろうか。

その場所が持つ固有の歴史や、それが表された物理的実体もまた、「かけがえのなさ」の源泉である。筆者は以前、東日本大震災の被災地、田老（岩手県宮古市）において、防浪堤（一般的に「防潮堤」と呼ばれる建造物を田老では歴史的にこう呼ぶ）がまちの歴史を抱き込みながら、まちの実存と深く結びついており、ゆえに、それを「まちのこし」のよすがとすべきではないか、と論じたことがある[109]。それを踏まえてみれば、旭若松や野田北部はやはり、区画整理事業や街なみ環境整備事業によって築いた街並みを、そしてそこで人々が編み上げてきた「つながり」を、さらにはその起因となった大災厄を、まちの記憶として後世に語り／引き継ぐ（＝「つなぐ」）ことをもって実存とするのが道なのではないだろうか（したがってあえて言えば、この地域はいつまでも、《かつて被災した地》という意味での「被災地」であってよいのではないか）。

旭若松の人々が「つなぐ」と言い続けなければならないのは、発災から 28 年が過ぎ、「あの日」をここで経験した人々がいま、自分たちの思いや活動を後世に「つなぐ」ことの難しさを感じているためでもあろう。確かに、旭若松・野田北部でも「担い手」は高齢化しており、組織や活動の継続・継承が課題となっているように見える。

このような局面でこそ、「地域」と「地域」の「出合い（直し）」が必要なのではないだろうか。（空間的には完全に連担しながらも）それぞれの歴史を持ってきた旭若松と野田北部が一つになることは今後ともあり得ないだろうし、その必要もない。しかし、「旧鷹取東第一地区」の「縁」をもう少し生かして、（1995 年のひとときのように）何かの行事・企画において協働してみれば、「出合い」もまた広がっていくに違いない。

そこで筆者が聞いたのが、若松鷹取公園で市民消火隊訓練を続けてきた F 氏の「夢」である。震災 30 年を期して（すなわち 2025 年 1 月）、大規模な消火訓練を実現させたい。南は若松鷹取公園から、北は日吉ひだまり公園（これも区画整理事業によって新造された公園である）から、西は大国公園から、東は消防車から、四辻に向けて一斉に放水するのだ、と。この「夢」が叶う時、旭若松と野田北部には一本の橋が架かるだろう。実現を願う。

（川手 摂）

（謝辞）本稿の執筆にあたっては、青池憲司さん、古市忠夫さん、林博司さん、福本春光さん、森崎輝行さん、菅利秋さん、菅典子さん、中井久恵さん、その他地域住民の方々に話をおうかがいしました。感謝申し上げます。

注

1）以上、神戸市都市計画総局『安全で快適なまちづくりをめざして　震災復興土地区画整理事業』2004年、11頁。
2）野田北部まちづくり協議会記念誌出版委員会編『野田北部の記憶（震災後3年のあゆみ）』1999年、14頁。以下、本書は『記憶』と表記する。
3）『記憶』10頁。
4）同上。
5）『記憶』149頁。
6）同上。
7）『記憶』150頁。
8）同上。
9）金治宏『NPO持続の条件』（神戸大学大学院提出博士論文）2008年、49頁。
10）たかとりコミュニティセンター編『たきび　たかとりの10年誌』2005年、10頁、24頁。以下、本書は『たきび』と表記する。なお本書24頁や金治、前掲、48頁によれば、H氏や後に登場するK氏は、鷹取教会が設置していた幼稚園（現在は閉園）の出身者であり、その意味（のみ）で教会との関係があったという。
11）『たきび』10頁。
12）『記憶』150頁。
13）『野田北部・鷹取の人びと　第14部』（青池憲司監督、野田北部を記録する会制作）、1：02：00付近。
14）『記憶』64頁。
15）『たきび』50頁。
16）『記憶』119頁。
17）金治、前掲、67頁。
18）同上。
19）天川佳美『ガレキに花を咲かせましょう』学芸出版社、1999年、20頁、『記憶』136頁。
20）「年の瀬の十二月に、夏祭りと同様、ちがう地域〔＝旭若松〕の方と合同でおこなわれました。震災後、はじめての事であり、焼きそば、ぜんざい、つきあがったおもちも振る舞われおみやげ用の小もちも用意されました」（『記憶』133頁）。
21）青池憲司「Circuit 06」第27回、2006年11月9日（http://nodahokubu.web.fc2.com/column3/column27.html）。
22）『野田北部・鷹取の人びと　第9部』（青池憲司監督、野田北部を記録する会制作）、0：21：00付近。
23）青池憲司氏ヒアリング。
24）朝日新聞1995年2月11日朝刊、4面
25）森崎輝行『野田北部地区復興まちづくりへの取り組み』1996年、252頁。
26）徳田剛「区画整理事業「第一号地区」への住民の歩み―阪神大震災下の鷹取東地区」『社会学雑誌』13号、1996年、85頁。
27）谷守正康「鷹取東復興まちづくり協議会」『建築とまちづくり』226号、1996年、27頁。
28）徳田、前掲、86頁。
29）同上。
30）同上。
31）同上。
32）同上、87頁。
33）「ガンバレ！ たかとりひがし　まちづくりニュース」創刊号。
34）芋田晴夫「鷹取東第一地区震災復興　土地区画整理事業の歩みについて」『都市政策』107号、2002年、95頁。
35）同上、95-96頁。
36）同上、104頁。
37）同上、96頁。
38）同上、98頁。
39）たとえば、「凍結」を継続するか解除するかについての意思決定も、各丁を単位として行われた。『野田北部・鷹取の人びと　第6部』（青池憲司監督、野田北部を記録する会制作）は、この時の地区における喧々諤々の議論の模様をとらえている。
40）「今回は「野田北部だけでやろうやないか！ うちだけで出来るやろ！」という一言がありましたので、前回より少ない人数になりましたが、みんなで苦労しながらなんとか当日までに間に合わすことができました」。「野田北部まちづくりニュース」No.18、1997年1月30日。
41）徳田剛・伊藤亜都子・大原径子「4年目を迎えた生活と住宅の再建の歩み：長田区鷹取東の事例」『阪神・淡路大震災の社会学　第3巻』昭和堂、1999年、149頁。
42）朝日新聞、1995年2月6日朝刊、18面。読売新聞、同日朝刊、31面。
43）朝日新聞、1995年9月12日朝刊、兵庫面。同様の発言は筆者がヒアリングをした地区住民からも聞かれた。
44）https://www.city.kobe.lg.jp/a56164/kenko/chiikifukushi/chiikihukushi/index.html
45）https://www.city.kobe.lg.jp/a10878/bosai/shobo/bokomi/about/bokomi3.html
46）https://www.fdma.go.jp/singi_kento/kento/items/kento189_05_shiryo4.pdf
47）https://web.pref.hyogo.lg.jp/kk41/documents/000044035.pdf
48）読売新聞、1999年5月24日大阪朝刊、25面。
49）浦野正樹「自主防災活動と女性の社会参加―婦人防火クラブの活動を中心に」（http://www.f.waseda.jp/muranolt/essay/essay030430.html）。
50）徳田・伊藤・大原、前掲、149頁・181頁。
51）読売新聞、2001年7月2日大阪朝刊、33面。
52）https://www3.nhk.or.jp/news/html/20230117/k10013950621000.html
53）読売新聞、2003年1月17日大阪朝刊、20面。
54）https://www.kobe-c.ed.jp/dit-es/notice/index/101/13327
55）読売新聞、2003年1月18日大阪朝刊、31面。
56）産経WEST、2017年1月17日（https://www.sankei.com/article/20170117-HQ5U74JHLVOY5JKDENZOFDHK5M/）。
57）徳田、前掲、93頁。
58）読売新聞、1995年10月18日大阪朝刊、27面。
59）その後、亡くなった自治会長の妻が、再建した自宅の1階で1998年6月におでん屋を開いた。ここは現在まで地元の人を中心に、人々が集う場となっている。
60）読売新聞、1998年8月20日大阪朝刊、38面。これが、2体の地蔵を近くの寺に引き取ってもらう前の「お別れの地蔵盆」だった（が、その場で住民たちがやはり地域に地蔵を残したいということになった）、という語

りもある（神戸新聞、2004年12月2日、https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/sinsai/10/rensai/200412/0005479761.shtml）。
61）読売新聞、1998年8月20日大阪朝刊、38面。
62）読売新聞、2003年9月14日、大阪朝刊、35面。
63）読売新聞、1999年1月16日、大阪朝刊、23面。ちなみにこの大鍋は現在も註59のおでん屋で使われているようである（読売新聞、2019年1月15日、大阪夕刊、11面）。
64）読売新聞、1999年1月16日、大阪朝刊、24面。
65）「震災を風化させてはならないと13年前から続けている。4年前からは全国の被災地にも復興への励ましを込めて正月用に贈っている」（朝日新聞、2008年12月24日朝刊、20面）。
66）読売新聞、2005年1月18日、東京朝刊、34面。
67）読売新聞、2005年4月7日、大阪朝刊、26面。
68）読売新聞、2016年12月26日、大阪朝刊、22面。
69）野田北部については、先行文献が比較的豊富である。ここまでですでに引用した文献の他、当事者の手によるものに、河合節二「野田北ふるさとネットの取り組み」『都市政策』132号、2008年、河合節二他「座談会　コミュニティ施策の方向性」『都市政策』155号、2014年。コンサルタントとしてまちづくりに関わった建築家によるものに、森崎輝行「震災復興まちづくりにおける合意形成とコーディネーターの役割―鷹取東第一地区の区画整理事業及び野田北部のまちなみ誘導地区計画の実践を通じて」『再開発研究』14号、1998年、森崎輝行「協議会活動と住民参加の復興まちづくり―鷹取東第一地区震災復興土地区画整理事業」『都市政策』95号、1999年。地区に関わった行政職員によるものに、芋田前掲の他、山田敏之「「市民による地域活動の推進に関する条例」に影響を及ぼした野田北部地区の取り組み」『都市政策』119号、2005年。地区に関わった研究者によるものに、佐藤滋・真野洋介・卯月盛夫他「地区レベルの復興まちづくりプログラムに関する考察―立ち上がり過程の分析を踏まえて」『住宅総合研究財団研究年報』24巻、1998年、真野洋介・佐藤滋「野田北部地区のまちづくり」『安全と再生の都市づくり―阪神・淡路大震災を超えて』学芸出版社、1999年、真野洋介・平岩正行「密集市街地再生の検証―神戸市長田区野田北部地区のまちづくり」『造景』32号、2001年、真野洋介「協議会組織から開かれたまちづくりのアリーナへの展開―長田区・野田北ふるさとネットの取り組み」『まちづくり』5号、2005年、真野洋介「多主体連携により生み出される第3のフィールド―10年の経験から」『復興まちづくりの時代』建築資料研究社、2006年、森反章夫「密集住宅地域へのふたつのアプローチ」『都市住宅学』83号、2013年。その他の研究者によるものに、野澤千絵・小泉秀樹・大方潤一郎「建ぺい率緩和を併用した街並み誘導型地区計画の適用効果と課題―神戸市野田北部地区を対象に」『都市計画論文集』36号、2001年、山際大貴・岡井有佳「密集市街地における街並み誘導型地区計画の効果と課題に関する研究―神戸市長田区野田北部地区を対象として」『歴史都市防災論文集』12号、2018年などがある。
70）朝日新聞、1998年11月16日朝刊、兵庫面。区画整理事業によって海運町に作られる防災公園（後に海運双子池公園と名付けられた）のデザイン、利用方法を考える「公園ワークショップ」も同時開催された（「野田北部まちづくりニュース」No.36、98年11月8日）。「野田北部まちづくりニュース」は、当初ボランティアが発行していたが、1997年1月13日発行のNo.18から住民が引き継ぎ、01年4月末のNo.57まで発行して「休刊」となった。そして2001年5月からは「わがまち野田北かわらばん」（以下、単に「かわらばん」とする）が発行されてきた。33号（2004年1月号）以降は（一部欠もあるが）野田北ふるさとネットのウェブサイト（https://www.nodakitafurusato.net/）で閲覧することが可能である。
71）「かわらばん」12号、2002年4月10日。
72）たとえば、「野田北部まちづくりニュース」No.42、99年6月5日や、「かわらばん」36号、2004年4月10日。
73）河合節二「野田北部はどこへ行くのか？」『月刊きんもくせい』2号、2003年、2頁。
74）https://www.toshiseibi.org/backnumber/back_num/bn/os_mach3/jirei.htm。なお、「宣言」の内容は次のとおりである（／は改行）。「大自然の暴威の前に成す術もなく夢力さに泣いた／平成7年1月17日から4年と2カ月／私達はなくなられた大勢の方の無念を生かし／災害に強いまち、地域に住む人々が皆知り合うまちを目指して／復興を目標にまちづくりを進めてまいりました。／新しい家、新しい道、新しい公園の目処も立った今日ここに／復興まちづくりに区切りをつけ、／さらなるコミュニティが育まれる新しいまちへ向かって／まちづくりすることを宣言する。」
75）同様にコンパクトタウンのモデル地区となった北区の大沢町〔おおぞうちょう〕との交流が2001年夏から始まり（ハイキング、どろんこバレーボール大会や綱引き大会、農業体験、大沢町の住民を招いての交流会など）、2002年11月には大国公園で朝市（「北区の農家に教わって育てた野菜を収穫」）が開かれたりしている。「かわらばん」を見る限り、大沢町との交流は2004年ごろまで続けられていた。
76）河合、前掲、40頁。
77）同上。
78）全文は次の通り（／は改行）。「ここ野田北部は、昭和のはじめ頃までは、まだ住む人も無く、一面の葡萄畑やったそうです。それが神戸の発展とともに、たくさんの人が住み着き、空襲や水害の被害も少なく、人情味豊かなまちとなって、心地良う暮らしてきました。／それが忘れもせん、あの平成7年1月17日の阪神・淡路大震災で、みんな多くのかけがえの無いものをなくしてしもたんです。／でも、その後がすごかった…。／なんでも言い合える、なんでも一緒にやれる、野田北部の仲間の力をひとつにして、まちの復興を目指して頑張ってきました。みんなで協力して地区計画や区画整理をまとめ、住宅を再建し、路地をきれいに整備し…。神戸で一番最初にまちの復興を成し遂げました。／ほら、ずいぶんきれいなまちなみになってますやろ。／そやけど気がついてみたら、あっちこっちで犬や猫の糞はほったらかしやし、迷惑駐輪や違法駐車は多いし、ポイ捨てのゴミやタバコの吸い殻はあるし…。／一体どうなっとんやろ？／ここらでもういっぺん、みんなで一緒に考え、やってみませんか！ この野田北部を、もっともっと安心して住

み続けられる美しいまちにしたい！／そやから、声を大にして、ここに宣言します！／わたしたちは犬や猫の糞はちゃんと始末します！／わたしらは迷惑駐輪・違法駐車なんかはしません！／わたしらはゴミやタバコの吸い殻のポイ捨てはせぇへん！／そやからみんなも一緒に協力してや！ お願いやで！」。

79）たとえば2009年6月10日の「かわらばん」98号には、「最近クリーンパトロールの参加者が少ない日が多いので、ちょっとお願いをしたいと思います。……特に下旬の夜の部の参加者が少ない様です。皆さんも、色々と忙しいことと思いますが、参加出来るときがあれば、朝・夕方・夜のいずれでも都合の良い日にご協力お願いします」という記事が見られる。

80）「かわらばん」159号、2014年7月10日。

81）河合、前掲、41頁。

82）「かわらばん」61号、2006年5月10日。136号、2012年8月10日でも同額で募集されている。

83）「かわらばん」92号、2008年12月10日。

84）たとえば「かわらばん」212号、2018年12月20日。

85）「かわらばん」262号、2023年2月20日。

86）「かわらばん」64号、2006年8月10日。

87）「かわらばん」109号、2010年5月10日。

88）「かわらばん」95号、2009年3月10日。

89）「野田北部まちづくりニュース」No. 9、1995年4月27日。

90）「かわらばん」57号、2006年1月10日。

91）「かわらばん」201号、2018年1月10日。

92）「かわらばん」211号、2018年11月20日。

93）「かわらばん」195号、2017年7月10日。

94）「かわらばん」29号、2003年9月10日。

95）「かわらばん」60号、2006年4月10日。なお、2018年には、野田北ふるさとネットの定例会（カンガエールサークル）で、防コミの「組織表が神戸市に届けられていないことが分かり」、「自治会の防災部を防コミに吸収してメンバーを決定することから始めてい」こうということになった。「自治会に「防犯・防災部」があり、防災訓練などの活動をしていたため……「防コミ」への意識が希薄」だった、ということで、自治会関係者にとって、防災訓練は自治会が主催しているのだと認識されていたのだろう。以上、「かわらばん」212号、2018年12月20日。

96）たとえば「かわらばん」157号、2014年5月10日、198号、2017年10月10日、210号、2018年10月10日など。

97）「野田北部まちづくりニュース」No. 45、1999年9月7日。

98）「かわらばん」3号、2001年7月10日。

99）「かわらばん」165号、2015年1月10日。

100）「野田北部まちづくりニュース」No. 57、2001年4月30日。筆者が確認できた限りでは、2007年6月を最後に行われていない。

101）もともとは1970年代に「野田老人いこいの家」として建設され、その後「浪松老人いこいの家」への移転に伴って、その後は野田北部の集会所として利用されていた。

102）「かわらばん」156号、2014年4月10日。

103）「かわらばん」169号、2015年5月10日。

104）「かわらばん」268号、2023年8月20日。

105）朝日新聞、2022年12月18日朝刊、21面。

106）「野田北部まちづくりニュース」No. 29、1998年2月8日。

107）https://www.kobe-np.co.jp/news/sougou/202301/0015963022.shtml

108）前日の昼、公園で準備をしていた男性が「なんか今年は「むすぶ」やとか言うとったけど、「むすぶ」じゃ終わってまうやないか！」と言っているのを聞いた。この言語感覚の鋭さに筆者は感服した。

109）川手摂「田老の「復興」、その現在と未来」『都市問題』108巻3号、2017年、34-35頁。